

狂気が生まれる時

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年4月23日

アメリカの銃の乱射事件で、忘れていたいやな感覚を思い出した。

もうずいぶん前だが、テレビドキュメンタリーでとりあげるために、ジョージア州・アトランタ郊外にある“テロ対策学校”に、1週間だけ体験入学をしたことがある。

そこでまず最初にやらされたのが、コルト45オートマチック拳銃の分解掃除だった。日本ではむろん、拳銃など触ったこともない。クラスは5人で、私以外は大きなアメリカ人の男だった。ほとんどの人が、銃の扱いに慣れているようだった。弾の込め方や安全装置の外し方を教わり、すぐ実射にうつる。

足を踏ん張り、両腕を前に突き出し引き金を引く。私は当然遠くの的には当たらない。

ここで徹底的にたたき込まれたのが、「本能的射撃」というものであった。つまり殺されたくなければ、何も考えずにまず相手を撃て、と。日本ではこんな人殺しの道具はとんでもない、と思っていたのに、的に当たればおもしろい。慣れる。さすがに私には45口径は衝撃が大きすぎて、36口径の銃にしてもらった。両手撃ちが片手撃ちになり、移動しながらも撃てるようになり、的も動くものになった。これはきっと、今度は生きている動物を撃ちたい、次は・・・となるのだな、と思った。

最終日、他の男たちは、広大な敷地内の林と川をはいずりながら、敵が隠れているという設定で、散弾銃を撃ちまくった。狂気と化すその姿を撮影しながら、テロ対策という名のもとに、新しいテロリストが生まれている、と思った。

発想を変え、銃規制を徹底しない限り、その構造は絶対変わらない。